

サイクリストに熱い声援を



県道前橋・赤城線を舞台に、「まえばし赤城山ヒルクライム大会」を開催。全長20.8km、標高差1,313mの全国でも屈指のコースに全国各地のヒルクライマーが挑戦します。沿道から、熱い声援をお願いします。沿道日時 9月28日(日)午前6時30分〜11時30分

問い合わせは スポーツ課 ☎027-898-5834

交通規制

ヒルクライム大会当日は、左図のとおり交通規制を実施します。ご理解とご協力をお願いします。

道路への応援落書きはやめて

道路への落書きは、法律で禁止されています。道路へのチーム名などのペイントは絶対にしていただき。



自転車オフロードレース「まえばしシクロ」開催

ヒルクライム大会前日は、全国的に珍しい都市部でのシクロクロス大会を開催。不整地のコースをオフロード自転車が柵や階段などの障害物乗り越えます。選手たちを間近で応援でき、見ごたえがあるレースです。日時 9月27日(土)午前9時〜午後2時30分

大会前日はイベントで盛り上がり

会場 ヤマダグリーンロード前橋北側特設会場(利根川河川敷)
大会前日はイベントで盛り上がりヤマダグリーンロード前橋で「サイクルフェスタ2014」を開催。子どもから大人まで楽しめる自転車教室など自転車のイベントが盛りだくさん。詳しくは、同イベント公式サイトブックページ (https://www.facebook.com/maebashi.cyclesta) をご覧ください。
日時 9月27日(土)午前10時〜午後4時



前橋学 市民学芸員 養成講座

前橋市の歴史文化遺産を活用した地域づくりの担い手となる「前橋学市民学芸員」養成講座(第1期)を11月まで開催中。このコーナーでは、すでに開催された講座内容の一部を紹介します。第2期は来年1月に開講予定。詳細は決まり次第お知らせします。

問い合わせは 文化国際課 ☎027-898-6992

第8回テーマ 朔太郎と詩人群像

萩原朔太郎は明治19年、北曲輪町(現在の千代田町二丁目)で出生。明治期は短歌、大正から詩に軸足を移し、口語自由詩という新しいスタイルを確立しました。学生時代から学業や人生などの悩みを抱え、どう生きていけばよいか分らないというような、悲痛な日記を記すほどでした。金沢市出身の詩人、室生犀星と出会ったのは、このように朔太郎が悩んでいる時期。



朔太郎と犀星の関わりを語る石山さん

二人はともに北原白秋主宰の雑誌「朱楽(サムボア)」で詩を発表していました。大正3年2月14日、犀星は朔太郎に会いに前橋へ(二人が出会ったことしがちょうど100周年)。朔太郎は犀星の作品から、犀星について、非常に繊細な神経を持った美少年を想像していましたが、実際に会って「非常に粗野で荒々しい」という印象を持ちました。朔太郎は犀星を利根川河畔の旅館、一明館に案内。一カ月近くの滞在期間中、毎日犀星を訪ねて二人で会話を重ねました。犀星について第一印象は悪かったが、次第に「非常にデリケートな神経と感受性を持った人間」という印象が変わり、親交を深めました。その後一人は「卓上噴水」(大正4年3月)、「感情」(同5年6月)などを創刊しました。

第9回テーマ キリスト教と前橋

新島襄、内村鑑三の二大クリスチャンを輩出した群馬は明治以来、地方としては、まれなキリスト教県と称されました。そして前橋はキリスト教諸教派による群馬伝道の中心拠点であり、その普及は製糸業と密接に関わっていました。明治3年、前橋藩小参事・



精糸原社跡地付近にある前橋ハリストス正教会(千代田町一丁目)

深沢雄象は、速水堅曹と共にスイス人技師・ミユラーの指導により、日本最初の器械製糸所・藩営前橋製糸所を細ヶ沢町(現在の住吉町一丁目)に設置しました。この製糸所は間もなく岩神町へ移転し、その後大渡製糸所と改称されましたが、所内にはキリスト教伝道所があり、普及活動が行われていました。さらに、研業社(明治8年)、精糸原社(同11年)を起しましたが、そこでも伝道所が設置されていました。なお、深沢は熱心なハリストス正教徒であり、親族や製糸工女などに洗礼を受けることを薦めていました。深沢は前橋市にキリスト教を普及させた人物といえます。

「花燃ゆ」放映決定記念企画

あなたの疑問に答えます!

平成27年NHK大河ドラマ「花燃ゆ」は、吉田松陰の妹で、初代群馬県令・榎取素彦の妻となる文が主人公です。このコーナーでは、「花燃ゆ」に関する皆さんの疑問に答えます。

Q. 榎取素彦と文(美和子)はどうして結婚したの?

A. 榎取素彦が群馬県令として活躍していた明治14年1月、榎取の妻で、文の姉・寿が亡くなりました。当時は、県令ほど身分の高い地位にある人が独身ということは、ありえなかったため、榎取にとって再婚は当然だったと考えられます。ところが、文は、榎取との結婚を最初は拒んでいたようです。それは、兄・松陰から「女の再婚は許さない」と教えられていたことが原因だったと考えられています。しかし、母・滝の説得で榎取と再婚をしたのです。正式な入籍は、明治16年5月3日ですが、明治14年の末には、すでに前橋で榎取と生活を始めていたようです。名県令・榎取の妻となった文は、懸命に夫を支え続けるのです。